

## 元興寺 がごぜの伝説

境内を歩いていると、目が鋭い人は、藪の中や岩の上に、ニヤリと笑う小さな鬼の像が潜んでいるのを見つけることができる。この鬼は全部で 5 体あり、元興寺が鬼退治の伝説の地であったことを物語っている。この伝説は、9 世紀初頭に刊行された『日本霊異記』に記載されたことで全国に知れ渡るようになった。

これは雷神からの贈り物と言われた道場僧侶を中心とした伝説である。道場は幼い頃から猛烈な力を持っていて、石の投げ比べでは皇族内の力持ちにも勝つことができたという。その後、道場は元興寺の童子となった。寺の鐘楼を守る少年たちを死なせていた鬼がいるという噂が流れ、道場は退治する仕事を志願した。鬼が真夜中に現れたとき、道場は行動を起こした。二人は夜明けまで戦ったという。道場は鬼の長い髪の毛を掴んだが、鬼は自らの髪の毛を引きちぎって逃げた。鬼は夜の闇に逃げ込み、二度と戻ることはなかった。（鬼の髪の毛は、その後しばらく寺に保管されていたが、紛失してしまった。）

この話が広まるにつれ、寺の名前（当時は「がごじ」と発音していた）が、「がんこ」または「がごぜ」という名の鬼に関する既存の民間信仰と融合したのである。この鬼は、何世紀にもわたって、慈悲深い守護神として、また元興寺のシンボルとして再鑄されてきた。